

2022年11月20日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 12章 35～37節

説教題：さらに大きな方

アメリカの中間選挙が話題になっていますが、選挙になると、メディアが町に出て「選挙に行きますか」と聞きます。ある人は「行きません」と答えます。「どうしてですか」と問うと、「誰がなっても変わらないからです」という返事が返って来ることが多いと思います。現代日本の政治ではリーダー1人が代わっても、政治・社会が劇的に変わるといえることはないかも知れませんが、問題が山積している社会にあって、見事に物事を解決して、国を良い方向に導いてくれる、そんなリーダーが現れることを、どこかで期待する思いは、依然としてあるのではないのでしょうか。イエス様の時代のユダヤ人は、そのようなリーダーの出現を熱烈に待っていました。

今日の個所に「キリスト」という言葉が出て来ます。「キリスト」という言葉は、ヘブル語の「メシア」をギリシャ語に訳したものです。ヘブル語の「メシア」とは、元々「油注がれた人」という意味でした。イスラエルでは、王、大祭司、預言者など、神の特別の働きをする人には、その人の頭に香油を注いで職に着かせました。その「香油を注がれた人」のことを「メシア」と言ったのです。ところが、イスラエル人(ユダヤ人)が大国の支配の中で長い苦しみを経験するようになると、人々の中に「ただ『王、大祭司、預言者』、そういう人ではなく、『神から直接送られるような超自然的な力を持ち、超自然的な働きをする人、この世を変えて、人々に祝福を分け与えることができるような存在』、そういう存在が現れなければもうどうしようもない、神はそういう存在を送って下さるに違いない」という期待が生まれて来るのです。そして、そのような「超自然的な存在」のことを「メシア」と呼ぶようになるのです。その時、人々の思いは、支配される側ではない、近隣諸国を支配していた側であった時の王、ダビデ王に行くのです。外国から苦しめられれば苦しめられるほど、人々は、ますますダビデ王を理想化し、英雄化し、やがて「我々が待っているメシアはダビデ王のような方であり、それは、ダビデの子孫として生まれて来るに違いない」という考え方が広まるのです。「ダビデ王のようなメシアが、ダビデの子孫から生まれて来る」、その待望の思いが人々の心に溢れていた、それがイエス様の時代であり、今日の個所の背景です。

前回までの箇所ではイエスの答えに参った宗教指導者達は、もうイエスに議論を持ちかけようとはしませんでした。彼らが質問しないので、イエスの方が質問された、そのような箇所です。「内容」と「適用」と学びます。

### 1：聖書の内容～「ダビデの子」を遥かに超えるキリスト

イエスは問われます。「律法学者たちは、どうしてキリスト(メシア)をダビデの子と言うのですか」(35)。「『メシアとはどういう者か』、そのことについて人々の目を開こうとされる」のです。律法学者達を中心に「メシアは『ダビデの子—(ダビデの子孫、ダビデのような者)』」という考え方が勢いを持っていました。だから「イエスこそがメシアだ」と思った人達は、イエスのことを「ダビデの子」と呼んだのです。10章でイエスがエリコに入られた時、イエスはバルティマイという目の不自由な人を癒されますが、彼はイエス様に向かって「ダビデの子イエスよ、私をあわれんで下さい」(10:48)と叫びました。イエスはその叫びに応じて彼を癒されました。

そのように本当に「キリスト(メシア)」であったイエス様は、ご自分が「ダビデの子」と呼ばれることを、拒否はされませんでした。それはつまり「『やがてダビデの子孫からメシア(救い主)が生まれて来るに違いない』と人々が切実に待っている、そこに込められている人々の悲しみ、苦しみ、痛み、切実な願い、それらを受け止めようとした」ということです。人々の心の中に、イエスは入り込もうとされたのです。そして、実際にイエスは、「ダビデの家系」から生まれて来られました。それは「マタイ福音書」等の系図が示す通りです。そしてそれは、かつて神がダビデ王に「…わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を

確立させる…わたしはその…王座をとこしえまでも堅く立てる」(2 サムエル 7:12-13)と約束された、その約束が成就したことを意味しました。

しかしそれでも、イエス様の「メシア」としての働きは、「ダビデの子」という表現では不十分なのです。「ダビデの子」と表現される「メシア」とは、「ダビデ王のように強力な武力で政治的・軍事的にイスラエルをローマの支配から解放してくれる救い主」という意味合いが強かったのです。しかしイエスは、そのような—「ユダヤをローマから解放する」というような—目的のために来られたものではありません。

「そのことを人々に理解して欲しい、『メシア』を『ダビデのような政治的な存在』として理解する考え方を改めて欲しい」、そのためにどうすれば良いのか。イエスは、「キリスト(メシア)」を「ダビデの子」以上の存在として示すために、「詩篇 110 篇 1 節」を用いられました。「詩篇 110 篇」は、ダビデが詠んだ詩です。その詩は何を語るのか。36 節の「主は私の主に言われた」は、「詩篇」では「主は私の主に仰せられる」(詩篇 110:1)となっていて、その「最初の『主』」は太文字で書かれています。「新改訳聖書」が太文字で「主」と書くのは、原典のヘブル語聖書に「ヤハウエ」と「神の本名(固有名詞)」が書かれている場合です。ですからこの言葉は、『神なるヤハウエは、私(ダビデ)の主(であるメシア)に言われた』とダビデが言った」ということになります。つまり「ダビデ自身が『来るべきメシア』を『わが主』と呼んでいる」こととなります。「であれば、どうして『メシア』が『ダビデの子孫』であろうか」というのがイエス様のポイントです。「ダビデ自身が本当の『メシア』は、自分を遥かに超えた存在である」ということを知っていたのだ。そして『メシア』とは、そのような者なのだ、イエスはそう問うて、人々の「メシア観(キリスト観)」を変えようとしておられるのです。言葉を換えれば、「救いとは何か」について、人々の理解を変えようとしておられるということです。

政治的・軍事的な解放によっても、世の中は変わるでしょう。少なくとも外国人による不当な支配から抜けられれば、それは大きなことでしょう。しかし、それで全てが解決するかと言えば、そうではないのではないのでしょうか。もちろん、為政者には「良い政治」をしてもらわなければなりません。しかし「国が変わり、支配者が変わり、政治が変われば、それで人間の問題が全て解決するか」と言えば、そうではありません。

ある時、熱心な浄土真宗の方と話をしたことがあります。浄土真宗の教えが基督教の教えと似ているのに驚きました。その方とお話しした後、少し仏教の本を読みました。その本によると、私達が使う「四苦八苦」という言葉は仏教用語のようです。「四苦(四つの苦しみ)」とは、「生・老・病・死：生まれること、老いること、病気をすること、死ぬこと」を言い、それに、さらに「4つの苦しみ」が合わさって「4つの苦しみ(+4つの苦しみ)で8つの苦しみ」ということで「四苦八苦」と言うようです。後の「4つの苦しみ」とは、「①愛する者と別れなければならない苦しみ、②恨みに思う者、憎んでいる者に出会わなければならない苦しみ、③求めているものが得られない苦しみ、④自己に執着するところから来る苦しみ」だそうです。藤井圭子という伝道者が「仏教は人間が到達した最高の哲学です」と言っておられましたが、「なるほど」と思われました。例えば人間の苦しみがそういうものであるなら、それは政治ではどうしようもないのです。人が生きて毎日の生活をする中で起こって来る様々な問題—{人間関係の問題、心の中の痛みや憎しみや、そういったものによる苦しみ、人間が自分を(回りの人を)苦しめてしまう罪の重荷}—そういったものは、政治が変わっても相変わらずあるのです。私達は、それに苦しむのです。だから真の「救い主」は、私達の生きる現実の問題の中で、私達を支え、慰め、立たせ、取り扱い、生かして下さる存在でなければならないのです。また釈迦が言われたように、愛する人と別れることは苦しみです。死の問題は、人間の最大の問題です。「全ての苦しきは、突き詰めればその根っ子には死の問題がある」と言った牧師がいます。そしてそれは、人間の力ではどうにもならない問題です。しかし、そこに光を当てて下さる方こそ「本当の救い主」なのではないのでしょうか。さらに、私達にとってより重要な問題は、もし「メシア/救い主」が「ダビデの子

—(ダビデのように政治的・軍事的にイスラエルを解放し再興される方)であるなら、「そんな救い主は、私達とは何の関係もない」ということです。その救い主は、2000年後の私達を救うことは出来ないのです。私達の「救い主メシア」とは成り得ない。

しかし感謝なことに、イエスは「どうしてメシアは、ただ『ダビデのような者』であろうかと、「もっと大きな存在だ」と言って下さるのです。では、どんな存在か。「マタイ福音書」の平行箇所は、次のような言葉で始まります。「イエスは彼らに尋ねて言われた。『あなたたちは、キリスト(メシア)について、どう思いますか。彼はだれの子ですか』(マタイ 22:41~42)。「あなたがたは、『キリスト/メシア』についてどう思うか」、それは言うならば「あなた達は『メシア/キリスト/救い主』をどのような方として見ているのか」ということです。イエスの弟子達も、この質問を聞いていました。しかし弟子達も、この質問に答えられなかったのです。なぜなら、彼らもイエスを「地上の王、イスラエルを解放してくれる王、『ダビデの子』という意味でのメシア」だと考えていたからです。しかしその「メシア像」は、彼らの生きる現実にもならなかった。なぜなら、彼らは十字架を前にして、クモの子を散らすように逃げてしまうからです。

しかし、その彼らが立ち上がる時が来るのです。イエスの復活を目撃し、聖霊の降臨を受けて、彼らは立ち上がるのです。そして彼らの「メシア理解」は変わります。ペテロは、聖霊を受けた後、それまで恐れていた指導者の陣取る神殿に出て行って、そこで世界で初めてのキリスト教のメッセージを語ります。「神は…イエスをよみがえらせました…神の右に上げられたイエスが…今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。(あなた方が希望を持っている)ダビデは天に上ったわけではありません。彼は自分でこう言っています。『主は私の主に言われた。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまではわたしの右の座に着いていなさい』。ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです(使徒 2:33~36)。ペテロは「メシアとはどういう存在か」、その答えが分かったのです。分かったから、イエスが用いた「詩篇」を引用して語ったのです。「人間の王なんかではない。十字架で死なれ、しかし死から復活され、今も生きて、私達をこのように力づける『神の霊・神の力(聖霊)』を送ることの出来る方、このイエスこそがメシアなのだ。メシアとはそんな方なのだ。ペテロのメッセージを聞いて、「私たちはどうしたらよいのでしょうか(使徒 2:37)と応答した人々にペテロは言いました。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくためにイエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば賜物として聖霊を受けましょう(使徒 2:38)。これは次のように言い換えることが出来ると思います。「聖霊を通して神と共に生きて行く生き方があるのだ、聖霊によってどうにもならない現実の中を強められながら生きて行く生き方があるのだ。聖霊の命によって死も恐れなくて良い生き方があるのだ。イエスは聖霊を送って『本当の救い』を経験させて下さる方なのだ)、彼はそう言ったのです。

長く話しましたが、しかし申し上げたかったことは、「『メシア/キリスト』なるイエス」は、ご自身が言うとおられるように、単なる指導者や教師や支配者、そんな存在ではないということです。死から甦り、2000年後の今も生きておられ、御言葉と聖霊の働きを通して私達の生きる現実に神の御業を運んで下さる方だということなのです。

## 2: 信仰生活への適用~イエスをキリストとして生きる

ではこの箇所は、私達の信仰生活に何を語るのでしょうか。イエスは問われました。「あなた達は『メシア/キリスト』をどのような方として見ているのか」、この箇所の信仰生活への適用は、「私達が私達の主イエスをどのような方としてとらえているか」ということだと思います。

イエス様は「私はあなた達の考えている『救い主』よりも、もっと大きな存在だ」と言われました。では、私達はそのイエスを、どのような方として受け止めているのでしょうか。「私に神の言葉を聞かせて下さる方、御言葉と聖霊の導きによって、生きる意味と、生きる力と、生きる希

望と、生きる道を下さる方、祈ろうとする時には、この方がいるから私は祈ることが出来ると思わせて下さる方、生きることも死ぬことも委ねることが出来る方、私の生きる現実に神の業を見せて下さる方…」、まだ色々な言い方が出来るでしょうが、いずれにしても、本気になってそのような方として理解し、人生に位置づけているのでしょうか。なぜこういうことを申し上げるかと言うと、ある神学者が言いました。「日本人クリスチャンは頭と体が別々。頭では信仰をするが、体では信仰をしない。信仰が生きる現実になっていない。頭だけの信仰だから、捨てようと思えばすぐに捨てられる」。「頭だけの信仰」、それがイエス様を捨てた弟子達の「メシア理解」でした。イエス様の方が「私はあなたが考えているよりも偉大な救い主だ」と言われるのですから、私達の方もそのイエス様を、そのような方として受け止めなければならないと思います。(言うならば)イエス様が「私が生きる全ての全て」になることが、私達の信仰の成長ではないでしょうか。

先日、「アナバプテスト・セミナー」がありましたが、「この絵」は、アナバプテスト・メノナイトとして生きたディレク・ヴィレムスという人のエピソードを記す絵です。彼は、再洗礼を受けたという罪で捕らえられ、牢獄に閉じ込められました。しかし、運良く牢獄から脱出することが出来ました。彼は、氷の張っている池を走って逃げました。ところが、彼の脱獄に気付いた官憲が追いかけて来ました。彼は牢につながれて痩せていましたから、氷は割れませんでした。官憲は良く食べ、良く飲んで太っていましたから、氷の上を走ったら、氷が割れて池に落ちてしまいました。その時、ディレク・ヴィレムスは、官憲が落ちたのを見て喜んだのではなく、イエスの「あなたの敵を愛しなさい」(ルカ 6:27)の言葉を思い出したのです。そして彼は、自分を追いかけて来た官憲を助けに行ったのです。その結果、彼はまた逮捕されるのです。それでもイエス様の言葉に生きたのです。(先日召天された兄弟が証しされた神父の話にも通じる話です)。これはあまりにも英雄的な話ですが、彼は「イエス様には命がけで従っても惜しくない」と思ったのです。極端な話です。しかし「キリストをどう受け止めるか」、それは具体的には、このような問題なのではないでしょうか。

私達は、私達の主が、政治的な指導者として来られたのではなく、私達の生きる現実に関わるために来られた方であること、私達を生かすために自ら命を捧げて下さった方であること、復活して今も生きて私の現実に関わって下さる方であること、その方を「私の主」として生きる者として、本当に「主の恵み」に応える生き方をしたいと願います。

イエスは、「私はあなた方の思いを遥かに超えた救い主である」と言われます。私達は、イエス様をそのような方として本気になって受け止め、本気になってイエス様と共に生きて行きたいと願います。